



公演パンフレットに掲載した古城十忍の文章です。

「私がパラサイトしているものの実体の説明」

#19 『パラサイトパラダイス』

この頃よく、泣きながら目が覚める。

泣きながら、というのは少々大げさだが、目覚めると涙がけっこう出ている、ということは多々ある。泣く原因となった夢の出来事を鮮明に覚えていることもあれば、なんとなく悲しかったという漠然とした感情だけを抱えて起き出さねばならないこともある。残念なことに、嬉し泣きで目が覚めたことは一度もない。

「歳を取ると人は涙もろくなる」という話はよく聞くが、寝ている間にも人は涙もろくなるものなのかは、私はよく知らない。(病気かもしれない)

鮮明に覚えている夢の出来事には毎回、必ず特定の人が登場する。一人ではなく、数人が夢を見るたびに順不同に代わる代わる現れて、私は夢の中で毎回その数人のうちの誰かと一緒に何かしらをして過ごしている。

登場する人たちはもちろん知っている人なのだが、共通しているのは、全員がすでに亡くなってしまった故人か、健在であっても今やまったく会うことのなくなった人、というその一点である。現在の日々の生活でちょこちょこ会っている友人や芝居仲間が夢に出ることは、まずない。

不思議なことに、夢の中で一緒に過ごしている出来事はすべて楽しく、笑顔はじけて、心が浮き立つようなことばかりだ。だから私はその夢の中では

いつも、わくわく、浮き浮きしていて幸せいっぱい、そしてたぶん、キラキラしている。なのに、目覚めると私は泣いている。そして物悲しい感情を抱えることになる。

なぜ幸せな気分の夢を見ている私が目覚めたときに泣いているのか。その謎を解き明かそうと考えてみたが、私は心理学者ではないので大したことはわからない。

ただ、「その人たちと、もう二度と同じ時間を過ごすことはないんだ」ということを、夢を見ている私の脳の中の別な部分が冷静にはっきりと悟っていて、そのことが悲しくて泣くのではないだろうかという察しはつけられる。

だから私はたぶん、私の夢に代わる代わる出てくる特定の数人に今なお、何かしらの「執着」があるのではないかと考えている。「依存」と言ってもいいかもしれない。

私が執着(あるいは依存)しているのは、その特定の「人」なのか、その特定の人たちと生み出した「思い出」なのかは定かではない。そう言えば、「歳を取ると人は思い出のみで生きられる」という話も割に聞くので、この「目覚めると泣いている」という現象は単に、私が迷わず老化の道を突き進んでいるということの証明なのかもしれない。(病気という見解も捨てきれない)

いずれにせよ、何かに執着、あるいは依存しているという今の私の状態は、たぶん良くない。少なくとも前向きではないと思われる。

人は何歳になろうが明日に希望を抱いて生きるもの、それが生き方の理想だとするならば、どうやら過去に執着(あるいは依存)があるらしい私の今の暮らしぶりは理想とはかけ離れているに違いない。

だが一方で、人はそんなに簡単に執着から逃れ、依存から抜け出せるのか、とも思う。

自分が成人して親元を離れる。結婚して育てた子どもが我が家を出ていく。愛した人と別れて別々に暮らすようになる。人生の節目節目で起こる、そういった「現象」は実現できたとしても、いつのまにかまとわりついた「精神的執着(あるいは依存)」は自分が死ぬまで逃れられない、それが人間というものではないのか、という考えもしつこく頭をもたげてくる。

などと、つらつら考えてみても、どうにも決まりが悪い。この先、「そういえば泣いて目覚めることはまったくなくなった」という日が私に訪れるのか、また、そういう日が訪れたほうが私にとってはいいことなのか、それもよくわからな

い。かと言って、このままでいいとも思えない自分もいる。

もし、私が今抱えている執着(あるいは依存)から抜け出せるかどうかを確かめられるとするならば、方法は恐らくたった一つ。それは夢に出てくる特定の数人のうち、すでに死んでしまった人は無理だが、今なお同じ空の下で生きている、その人たちと今一度、直接会ってみること。会って一日でも数時間でも、再び一緒に時間を過ごしてみること。

それが唯一の、今の私に変化をもたらす名案なのではないかと薄々思いついているのだが、それを実行に移すことは、とんでもなく怖いことのような気がして、今も実行に移せないでいる。(病気かもしれないし)

2016年6月

「私はどのように人生の幕引きをしたいのか？」

#18 『死に顔ピース』

私はいつ、どのような状態で、どのような環境で死ぬことになるのか。具体的にそれを想像するのは、まあ、愉快なことではない。

若い頃は何とはなしに、私は早死にするだろうとぼんやり思っていた。この身が安穩と40代を過ごし、もはや老化を隠せぬ50代を迎えることになろうとは考えもしなかった。それだけ若い頃は今日明日をどう生きるか(乗り切れるか)、そのことだけに必死で、遠い先のことなんぞ頭に入る余裕はまるでなかったとも言える。

しかし今、この身は50代半ばとなり、身近な人や仕事上で密な付き合いのあった人たちがぼつりぼつりとこの世を去っていくようになり、次第次第に自分の「死に方」についても、あれやこれやと思いを巡らせるようになった。

私の父親と母親はどちらも癌で死んだので、突発的な事故にでも遭わない限り、たぶん私は癌で死ぬ。事実、早くも2010年に胃癌が判明し、「ついにその時が来たか……」と肝を冷やしたが、幸い発見が早かったので内視鏡手術で事なきを得て、すでに5年が経過している。

そう人に話せば、「もう安心ですね」と言ってもらえたりもするが、それでも私は癌で死ぬだろうという確信を今なお持っている。

母親は癌だと診断されたその日に即入院となり、すごい勢いで坂道を転がるように、わずか2カ月ほどで病院で死んだ。それから数年後に同じく癌になった父親は「家に帰りたい、家に帰りたい」と呪文のように言い続けながら、約2年ものあいだ入退院を何度も繰り返した挙げ句、結局は病院で息を引き取った。

しょうがない。これはもう定めだと思っしかない。両親を見れば遺伝的に避けられないのは明白なので、私は癌で死ぬ覚悟はとっくにできている。はずだ。たぶん。

なので別に癌で死ぬのは構わないのだが、ただ、どうしても避けたいのは「激しい痛み」を伴うことだ。何ごとにも根性なしの私が想像を絶する痛みに

耐えられるとは到底思えない。だが残念ながら両親ともに、見ているこちらが逃げ出したくなるほど苦しみ抜いて死んでいったので、その点だけはどうか遺伝の影響を回避できないものかと、今から死ぬほど気に病んでいる。

もはや治癒は望めない患者のために痛みや不安を和らげる「ホスピス・プログラム」が日本で初めて大阪で始まったのは1973年。ホスピス専門の病棟が初めて浜松に開設されたのは1981年。我が国の「終末期医療」の歴史はさほど長くない。だが心強いことに、この間に痛みを緩和する医療は確実に進んでいる。

つい最近、「終末期鎮静」という医療があることをNHKの報道番組で知った。これは、「苦痛を取り除くための鎮静剤を投与し、意識を落として眠ったまま最期を迎える」というもので、多くのケースでは水分や栄養は与えられず、眠ったまま数日から1週間で死亡するらしい。

番組で取り上げられていた末期癌の男性は息も絶え絶えに、「早く、早く取ってください、痛み。痛くて痛くてたまらないよ」と苦悶の表情で言い、その様子を見てとった医師は本人と家族から最終同意を得た上で男性に鎮静剤を投与した。投与することを了解した男性は、直ちに妻や子どもたちに涙ながらに別れを告げ、そのまま意識が戻ることなく3日後に帰らぬ人となった。

私が余命幾ばくもない状態になったとき、いったい私はどのように自分の人生の幕引きをしたいと思うのだろう。安楽死とどこが違うのか、という疑問が大いに頭をかすめる「終末期鎮静」は私の選択肢に入るだろうか。いや、そもそも助からないのなら、なぜ安楽死がいけないのか、その確固たる答えも私の中にはない。人生の最後の最後に「痛みを耐え抜く期間」が定めとしてあるのなら、それを受け入れるのもまた私の宿命……などと人に従うことが死ぬほど嫌いな私が素直に思うとも思えない。

いやいや、医学の進歩は目を見張るほどにすさまじい。投与されれば、あら不思議、右手が勝手にピースサインを出すようになり、なぜかニマニマ笑いながら息を引き取る。そんな虫のいい新薬が必ずや開発されるに違いない。……などと結局はろくでもないことしか考えない私は、きつろくでもない死に方しかしないんだろうなあ、どうあがいても。

ああ、この上なく我が身が哀れで、残念で、仕方がない。

2016年3月

「長寿は幸せ、と思える人はどれほどいるのだろうか？」

#17 『ビーイング・アライブ』

日本は今や超高齢化社会に突入し、人口も減少の一途。今から35年後の2050年には、日本の総人口はついに1億人を切るというデータもあります(内閣府『2015年版 高齢社会白書』)。もちろん、人口に占める老人の比率も現在より相当に高くなります。

言わば、「超・超高齢化社会」です。

そうなったときの社会の有りようを、そこに至るまでの社会の恐らくはとてつもなく大きな変貌を、具体的に実感を持って想像できる人は果たしてどれくらいいるのでしょうか。

書店に行けば、その変貌が2015年の今、とっくに始まっていることを教えてくれる本が実にたくさん平積みになっています。『老人社会漂流—他人事ではない老後の現実』『老後破産—長寿という悪夢』『下流老人 一億総老後崩壊の衝撃』『老人たちの裏社会』……。

それは決して明るい社会ではない、というか、今すでにお年寄りの人にも、これから老人になる人にも(つまり、日本国民の誰にとっても)、ほとんど「お先真っ暗な」社会です。

話は変わるようですが、今年3月に「自殺」をテーマにしたドキュメンタリー・シアター『誰も見たことのない場所2015』という芝居を上演しました。この芝居は自殺に関わることになった数多くの方々にインタビュー取材をし、その話をもとに一つの作品にまとめたものです。

その際に、上演時間の都合上、泣く泣くカットした場面がいくつもあるので、その中で時間が経つにつれだんだんと私の中に大きく巣くうようになった「お話」があります。

インタビューに応じてくれたのは、70代半ばの、品のいいおばあちゃんでした。その方のお母さんは74歳で入水自殺しました(朝早く、多摩川に飛び込んだそうです)。

で、その方は、「母が死んだとき、どうして自殺なんてしたのか、まったく理

解できなかったけれど、自分が母の年齢を超えてしまった今、自殺した母の気持ちがよくわかるようになった」、要約すると、そうおっしゃいました。

「……なんかね、何もなくなっちゃうような気がするの。……なーんにも。なーんかね。それまではそんなに寂しいとか思わなかったんだけど、母の歳を超えて、この頃はそう思います。……このさみしさっていうのはねえー、ほんとに、どう言ったらいいんでしょうねえ……」

書店に平積み of 書籍も、インタビューに答えてくれたおばあちゃんの話も、どこかやるせない気持ちになり、暗澹たる思いに駆られます。

長寿世界一だというのに、どうやら幸せな老後をつかみ取るのは難しい国。「終わりよければすべてよし」と言うのに、人生の終わりに大いなる困難が待ち受けている社会。

やはり、こうした現実には嬉しくありません。「しょうがないよ」と甘んじて受けるわけにもいきません。たとえ悪夢のような老後であっても、人は生きていかなければなりません。生きていく方法を、心持ちを、社会システムを、なんとかして見いだしていかなければなりません。

そういえば自殺に関して、「独り暮らしの老人より、家族と同居している老人のほうが自殺率は高い」、というデータもあります。

そう考えるとやはりこれは、決して老人だけの問題ではない、と言えそうです。

本作『ビーイング・アライブ』は、そんなことをあれこれ考えて取り組み始めました。

すでに老境にさしかかっている身とはいえ、まだまだ自分の「老いた姿」をリアルに思い浮かべられるほどの想像力がない私にとって、これはなかなか骨の折れる仕事でありました。と同時に、まだ見ぬ世界に足を踏み入れていくような、わくわくした思いも少なからずあったことを申し添えておきます。

2015年12月

「私たちは何を得て、何を失ったのか。」

#16 『イチエフ・プレイズ』

【ジレンマジレンマ】【恐怖が始まる】2作品同時期上演

『ジレンマジレンマ』の初演は2012年3月。奇しくも千秋楽は3月11日で、ちょうど「あの日」から丸1年。その日のカーテンコールでは観に来ていただいたお客様にお願いし、一緒に1分間の黙祷を捧げました。

そのとき黙祷しながら、相も変わらず天の邪鬼な私は、こんな芝居を上演したからって何かが変わるのか、何か少しは変わったとしてそれがいったい何の役に立つんだと、半ば自嘲気味に、今なお時代を覆う漠たる不安や言いようのない虚無感に全身が包まれていたことを昨日のこのように覚えています。

『恐怖が始まる』の初演は翌2013年の5月。「あの日」からすでに丸2年あまりが経過していました。時の政権は、「失われた3年」と揶揄された民主党時代から再び自民党の手に渡り、早くも原発再稼働の動きが日に日に鮮明になってマスコミ報道を賑わせていました。

そのニュースを聞くにつれ、『恐怖が始まる』に脚本執筆のために取材させてもらった元福島第一原発の作業員・Tさんご夫婦の、「いやもう、ぐちゃぐちゃだよ、ひどくなる一方だよ」「それでも生活していかなきゃいけないからねえ」と語る、何かをあきらめ切ったようなお二人の声を思い出しては、さすがに能天気な私も何かに騙されたような、なんともやるせない気持ちになったりしたことをはっきりと記憶しています。

そして今、2015年7月。「あの日」から丸4年以上の月日が過ぎました。

アベノミクス効果で企業は増収増益、税金は17年ぶりの高水準に達するとか、東京での開催が決まったオリンピック・パラリンピックの新国立競技場には2500億円もの予算をかけるとか(なんと、ロンドンオリンピックのメイン会場建設費に約3倍!)、なんとも実感の乏しい絵空事のようなニュースばかりが駆け巡り、「あの日」の記憶はすっかり遠い過去へと追いやられてしまったかのようです。

ですが、「あの日」以降、心に染みついた言いようのない虚無感や、やるせない気持ちは、今でも私の中ではくすぶり続けています。

あの頃の、居ても立ってもいられなかったざわざわした思い。足下がぐらぐら揺さぶられ続けたような感覚。それらは今、能天気な私の中ではどうなっているのか。この4年あまりの時を経て、私たちは何を得て、何を失ったのか。そのことを確かめてみたくて、今回の無謀とも言える2本立て上演に踏み切りました。

『ジレンマジレンマ』と『恐怖が始まる』が描いている世界はまったく別ものですが、どちらの作品も「あの日」から始まった福島第一原発事故に起因しています。だとすれば、敢えて『イチエフ・プレイズ』と銘打って2作品を同時期に上演することで、あれから4年以上が経った今、何かがいっそう鮮明に浮かび上がってくるのではないかと、くすぶり続ける思いに何かしらの指針を与えることができるのではないかと……と、浅はかながら、のど元過ぎればすぐに忘れ、あれよあれよとすぐに時代に流されてしまう演出家は考えた次第です。

2015年7月

「どの言葉にも宿る、真実の重みを噛みしめる」

#15 ドキュメンタリーシアター 『誰も見たことのない場所2015』

つい先日、広島市に住む長年の知り合いから電話で、「私の事務所で働いている人の姪がね、自殺したのよ。ほんの1週間前なんだけど……」と聞かされました。22歳だったそうです。

まだまだ人生これから、という彼女に何があったのか知る由もありませんが、やはり何か残念な、何か寂しい気持ちになります。私たちと同じ社会で、同じ時代に生きているのに、いったい何が彼女を「自ら命を絶つ」という行為に追いやったのか、そのことがとても気になります。

『誰も見たことのない場所』の初演は2007年でした。今なお「経済大国」にありながら、「世界一、安全な国」と言われながら、毎日毎日、相当な数の人が自ら命を絶っている国。これは先進国では突出して高い数字です。ここまで多くの人が「自死」に向かうのはどうしてなのだろう。何か特別な理由があるのだろうか。諸外国と比べて、日本社会の何が「特殊」なのだろう。そのことを知りたいと思い、この芝居の製作に踏み切ったことを今でもよく覚えています。

初演から8年が経とうとしている今、「自殺」をめぐる状況はずいぶん変わりました(とされています)。「自殺対策基本法」という法律が制定され、国が自殺対策に予算をつけるようになり、各地方自治体がさまざまな「自殺減らし」に乗り出しました。おかげで2012年には14年も続いていた年間3万人以上の自殺者数がようやく3万人を下回りました。それでも未だに一日に約70人が亡くなっています(警察庁の速報値によると、2014年は2万5374人)。

今、「自殺」をめぐる状況は本当に変わったのだろうか。変わったとすれば何が変わり、何が変わっていないのか。また、この8年で新たな問題は出てきていないのか。むずむずと、そういうことを知りたくなり、新たに多方面の方々に取材をして話を聞き、改めてこの作品と向きあってみよう。そう思い至って

今回、大改訂版の『誰も見たことのない場所』をスタートさせました。

しかし、私がやりたいのは「自殺の現状はこうだ」などと分析し、それをもとに何かを声高に訴えることではありません。「人間一人ひとりに思いもよらぬドラマがある」と考えている私は、自殺に関わる人たち、関わらざるを得なくなった人たち一人ひとりには、いったいどんなドラマがあるのか(あったのか)。その人たちはどんな感情に揺さぶられたのか。今回は特にそのことを知りたいと思いました。私は「演劇とはとりもなおさず人間を描くことである」とも思っていますので、今まで半世紀以上生きてきて、今まで一度も「死にたい」と思ったことのない私からすれば、「自殺」はさまざまな価値観を知るチャンスであろうとも思うのです。

初演の時は延べ70人近い方々に、今回の大改訂版では新たに20人以上の方々にインタビュー取材をお願いしました。「ドキュメンタリーシアター」はすべての台詞がインタビューによるもので、劇作家がフィクションとして書いた言葉は一つもありません。どの言葉にも宿る、真実の重みを噛みしめつつ、人間の強さ・弱さ・不思議さと向き合いながら稽古を重ねました。

新たな取材ならびに再取材に応じてくださった皆さんに、この場を借りて改めて感謝します。

「人の話を聞くことの大切さ」「人に伝えていくことの難しさ」を今一度、教えられた思いです。あなた方の思いが、本日この劇場に足を運んでくださった皆さんの心に、少しでも届けばいいのですが(同時に、演劇で表現することの面白さも)。今そのことを切に思います。

2015年3月

「忘れられない風景・忘れてはならぬ光景」

#14 『海のとっぺん』

「死ぬ間際には、自分の人生が走馬燈のように駆け巡る」とよく言いますが、それが本当だとして、いよいよそのときを迎えた私はいったいどんな人生の場面を思い出すのだろう。

そんなことを最近、よく考えます。

私の心に強く刻みつけられている場面とは、果たしてどんな光景なのだろうか、と。

そんないつ来るのか、どんな状況で訪れるのか、場合によって思い出す場面は違ってくるのかもしれませんが。それでもやはり、ふるさとに関わることは鮮明に蘇ってくる第一候補に挙げられそうな気がします。

ずいぶん昔に畳んでしまったので今はもう跡形もないのですが、私の実家は旅館でした。

長く曲がりくねった板張りの廊下の両側に客間が並ぶその旅館で、子どもの頃、客のほとんどいない昼間に隠れんぼをしたことがあります。でもあまりに広く、また入り組んでいたのも、鬼が隠れた人を見つけ出すことはほぼ不可能で、隠れんぼはまるで成立しませんでした。見つけるほうも隠れているほうも、ただただ孤独な時間をひたすら味わうことになり、今思えば「人生の虚しさ」を初めて噛みしめたのはあのときかもしれません。

旅館の大広間は50畳ほどもあり、その端と端に2、3人ずつ分かれて、山のように積み上げた座布団を片っ端からビュンビュン投げ合う「戦争ごっこ」をして、しこたま親にひっぱたかれたことも映画のワンシーンのように思い出せます。

「楽しいことには痛みが伴う」。この日、この教訓が強く心に焼き付けられました。

それにしても、高校を卒業してふるさとの街を出た私は、その後、何度

となく引っ越しを繰り返し、今では東京都内の住宅街に暮らしていますが、「家」として思い出すが、子どもの頃を過ごした「今は影も形もない実家」だという事実は、いったいどう受け止めればいいのか。劇的な人生の場面は、その後のほうがずいぶんたくさんあったはずなのに。(たぶん)

私は実家の旅館にたいそうな愛着があり、同時にそんな我が家が大嫌いでもありました。

なので、子どもの頃を過ごした旅館があれよあれよというまに更地になってしまったとき、ただただ呆然と、泣きたいような、それでいて「負けるな、これが人生だ」とオレを鼓舞したくなるような、虚無感とふつふつと湧き起こる闘志、二つの大きな感情が渦巻く、なんとも奇妙な気持ちで自分をもてあまして眺めていました。

恐らく、そのときからだと思いますが、テレビのニュースで戦争や自然災害によって「見るも無惨な姿に変わり果てた家々」を見るたびに、虚無感と闘志、この二つの感情が今でもないまぜになって湧き起こります。

不思議なことにそれは、「泣き叫ぶ人」や「疲労を全身にまっとうなだれる人」を見るよりも、「見る影もなくなった家々」を目にしたときのほうが強いのです。

しょうがない、しょうがない、これが人生だ。ふざけるな、ふざけるな、こんな人生であっていいはずがない、負けてたまるか。……………。

私は間違いなく天の邪鬼な性格ですが、もしかしたらオレの死に瀕したときも、走馬燈のように我が脳裏に浮かぶのは、好意を寄せたあの人や苦楽をともにしたあの人、といった「人の顔」ではなく、「見るも無惨に変わり果てた家々」がぐるぐるぐるぐる駆け巡るのかもしれない。

病院のベッドに横たわり、これが人生さ、いや、まだまだ、まだまだ生きてやるぞ、負けてたまるかと、みっともないほど生に執着しながら。

2014年11月

「私が毒舌家と呼ばれる理由」

#13 『毒舌と正義』

もちろん、私は「よかれ」と思って歯に衣着せぬ物言いでの的確な芝居のダメ出しをし、会議の席でも率直この上ない真っ当な意見をしょっちゅう口にするのですが、そんな私の物言いに対し人からはよく、我が意に反して「毒舌家」「皮肉屋」といった評価を受けます。すると私は即座に心の奥底で呟きます。「なぜだ？ 私は自分に正直に言ってるだけなのに」

もちろん、私は男のくせに竹を割ったような性格でもなく、時にいいいじと「ああ、あんなこと言わなければよかった」と後悔しきりのときもありますが、言わなかったら言わなかったで、「なんで本当のことを言わない？ おまえは偽善者か？」と大きなストレスを抱え込むことになります。まことに我が性格ながら、つきあいにくい男です。

どうやら世の人々は、「滅多なことでは本当のことを言わない」。そう気づいたのは我が人生の華やかなりし頃はとうに過ぎ、すっかりオッサンになり果てた頃だったような気がします。

安倍首相の「集団的自衛権がなぜ今、必要なのか」とこぶしを振り上げつつ熱く語られた記者会見でも「本当のことは言わない」。日中韓のみならず、このところ緊張関係が日に日に強まっているアジア各国の政府スポークスマンも、「最初にぶつかってきたのはあっちだ」と真顔で語りながら「本当のことは言わない」。

世の人はこうした物言いや「嘘」とは呼ばず、どうやらこれが「戦略」というものらしいと気づいたのもそんなに遠い昔のことではありません。

これに比べたら本当のことをひたすら隠し続けた挙げ句に、「本当は全部自分がやりました」とあっさり観念したパソコン遠隔操作事件の犯人はまだまだ純粋な人間の部類に入るのかもしれませんが。

ともあれ、なぜ私はこうも「戦略的な物言い」ができず、周囲の人々から「毒舌家」だの「皮肉屋」だの「DS」だのと言われてしまうのか。その原

因を探るべく我がこれまでの人生をつぶさに振り返ってみると、こうした私を育んだのは「学校」にあったのではないか、そう思い至りました。

というのも、学校に通っていた多感な時期にもっとも頻繁に接する大人は「先生」です。この先生と呼ばれる人たちの物言いが私にはいちいち信じられず、何か裏があるのではないか、何か隠しているのではないかと疑惑の目を向け始め、次第次第に疑惑は「絶対に何かをごまかしている」という確信に変わり、やがては「先生がそれを正しいと言うのは指導要領に書いてあるからですか?」「先生がそう言うのは生徒を信用していないからですよ?」などとクソ生意気なことを真正面からぶつけるような、まあ、なんとも扱いにくい生徒になっていました。

「教育」というのは大切です。

多感な頃に刷り込まれた思いはなかなか簡単に拭い去ることができません。日中韓でまったく着地点の見えない歴史認識問題、従軍慰安婦問題、領土問題。こうしたことの解決を難しくしている大きな原因も、それぞれの国の教育にあると私は考えています。

と、大きく風呂敷を広げつつ、私が「毒舌家」と評されることの自己弁明を延々と書き連ねましたが、「こんな私の言うことを鵜呑みにして、刷り込まれて、大人になっていく子たちもこの中にはいるのだらうなあ」などと思いつつ、時に高校生たちに「先生」と呼ばれながら授業をしている私が私は恐ろしい。そう思う毎日です。

2014年6月

「経験を学習すること」

#12 『流れゆく庭—あるいは方舟—』

3月11日のあの日。「東日本大震災」というディザスター(災害)を引き起こすことになった大地震・大津波の発生したあの日から早いもので丸3年を迎えようとしています。(本公演中に丸3年の日は訪れます)

あれ以来、私の中では何かにつけ「あの日」が時の流れを測るひとつの物差しになっている感があるのですが、果たして今、あれから「もう3年」なのか、「まだ3年」なのか。この認識の違いは相当に大きいものがあります。私たちは3年間という決して短くはない時間を経て、いったい何をどれだけ学習したのだろう。そうした思いがしょっちゅう頭の中をかすめます。

本作品はワンツーワークスの前身である「劇団一跡二跳」のファイナル公演として、2008年に上演した舞台の改訂版です。その初演から、わずか3年足らずで「東日本大震災」は起こりました。

集中豪雨と大津波という違いこそあれ、この芝居は「水の災害」にまつわることを描いていたわけで、期せずして2008年の舞台が「予言公演」のようになってしまったことを、あの日、帰宅困難者となって隙間もないほど人で埋め尽くされた道路をひたすら延々と自宅へ向かって歩きながら、私は一人、「まさか、こんなことになるなんて……」と整理のつかない頭で思い浮かべたことを昨日のこのように覚えています。

今回の上演に当たり、当初は「2014年の今」に設定を置き換えるつもりだったので、「戯曲の書き直しが大幅に必要」と思って取り組み始めたのですが、すぐに壁にぶち当たり、「本当に設定を置き換えていいのか?」と大きな疑問を持つようになりました。というのも、この芝居を観てくださる方々全員の脳裏には、「あの日の津波の映像」がイヤというほど焼きついているに違いないからです。「あの恐怖の映像を前にしたら川の氾濫なんて大したことないよね」と、劇団メンバーの一人は言いました。「あれからみんなの防災意識も随分と変わったからねえ」と、ぼそりと言うメンバーもいました。

確かに「何か」は変わったかもしれません。これまでの高さや長さをはるかに凌ぐ防波堤の建設。緊急地震速報のメール配信。目に見えて変わったものは数多くあります。

ですがその一方で、「なかなか変わらないもの」も根深くあるのではないか。もしかしたら本質のところでは、私たちはほとんど何も変わっていないのではないか。この3年を振り返り、あれからの自分自身の行動とも照らし合わせてみて、私は次第にそう思うようになっていきました。

で、その結果として、改訂版では戯曲の手直しはしましたが、2008年という設定は変えませんでした。そのほうが「今の私たちに喚起させるものはよほど大きいのではないか」。そう考えたからです。

果たして、この私の考えが正しかったのかどうか。それは本日、足を運んでくださった皆さんお一人お一人に観て判断していただくしかありませんが、「私たちがいったい何を学び、何を学んでいないのか」、私自身、改めて見つめ直したいと思っています。

2014年2月

「想像が見つからないことを、想像する力。」

#11 『息をひそめて—シリア革命の真実—』

もう1年以上も前、『息をひそめて—シリア革命の真実—』の第1稿を読んで上演しようと思ったとき、2013年10月の今現在、シリアがこんな状況に陥っているなんて予想もしなかった。

「上演する頃には新政権が生まれ、革命なんて時代遅れの昔話になってるかもなあ」

誠におめでたいというか、そんなふうを考えたりもしていた。呑気なものである。

ご存じのように、シリアの内戦は今なお、まったく終わりが見えていない。あろうことか、化学兵器まで使用されたとニュースは伝えた。これを機に、アメリカをはじめ諸外国が次々に声高にもの申し始めたものの、いつしかそれもアメリカとロシアの駆け引きの場にすり替わり、結局はシリアでの惨状を国際社会はただ静観する、つまり表向きには「何もしない」という事態のまま膠着が続いている。

おかげでシリアの国内情勢はいよいよ複雑化、ますます泥沼化を極めている。いったいどんな幕引きが待っているのか、解決の糸口は未ださっぱり見えない。はるか遠い国のことながら、シリアはいったいどうなってしまうのだろうと、私は今、半ば呆然とした気持ちになっている。

化学兵器が使われ、アメリカが「ついに軍事行動を起こすか?」という事態に及んだため、日本のマスコミがニュースに取り上げる頻度が上がった。それまでは、まさに「対岸の火事」で、たいして報道されることがなかったのに皮肉なものである。シリアでどれだけの人が殺されようが、アメリカがどう動くのか、さすがアメリカの属国、我が日本のマスコミはそのことにしかニュース価値を見いださない。

シリアの内戦では、死者はすでに10万人以上、故郷を追われた難民は200万人を超える。

この数字をリアリティを持ってイメージできる人が日本にはどれだけい

るのだろう。今日もまた、明日もまた、罪のない人の命が奪われていく現実を、どれだけの人が切実に想像できるのだろう。

日本のマスコミに愚痴る私にしても、誠に情けないが、その想像力は到底及ばない。

この同じ地球上で今、逃げ惑う人がいる。命を奪われる人がいる。彼らはただ「自由」を手にしたいただけなのに。「自由」をいったん失ってしまえば、再び手に入れることがどれほど困難なことか。

日本には当たり前にあると思われている「自由」が、この先も当たり前のようにあり続ける保証など、どこにもない。「集団的自衛権の見直し」「特定秘密保護法の閣議決定」がニュースで伝えられるたびに、シリア情勢は決して対岸の火事ではないと恐れおののく私は心配性すぎるだろうか。

演劇が最大に拠って立つところは「想像力」である。本作に登場する多くの「実在する人々」が語るその言葉の奥に、その言葉の先に、いったいどんなことがあるのか。どんなことが起ころうとしているのか。平和ボケの私の頭ではなかなか想像が及びそうもないが、それでも「想像がつかないことを想像する力」を私は懸命に振り絞らなければならない。今、そう思っている。

2013年11月

「川津羊太郎に潜む「虚人」」

日本の演劇人を育てるプロジェクト 新進演劇人育成公演

『虚人の世界』

川津羊太郎さんとは、九州の劇作家を対象にした「九州戯曲賞」を通じて出会った。川津さんは戯曲を応募した人、私はその最終審査員の一人。そういう立場での出会いだっただけで、ご本人に会うより先に「川津羊太郎という人」を戯曲で知ることとなった。

川津さんの処女戯曲『妄膜剥離』はいきなり最終選考に残り、5人の審査員の間ではこの戯曲に授賞すべきかどうかという一点に、議論のほとんどの時間を費やした。惜しくも受賞はならなかったが、それだけ他の候補作を圧倒していたのは間違いなかった。

翌年、川津さんは『憑依』という戯曲で再び最終選考に残り、私の前に現れた。このときもこの戯曲が授賞にふさわしいかどうか議論は白熱したが、晴れて大賞を射止めることとなった。

『妄膜剥離』と『憑依』を読んだ私の感想は乱暴にまとめると、こういうことになる。

暗い。しつこい。粘着質。不気味。陰惨……。紡ぎ出される言葉の一つ一つがねっとりとしていて気が滅入る。気が滅入るのだが、言葉によって立ち現れてくるところか異様な世界は具体的なイメージを持って、こちらの五感にぴったりと張りついてくる。だから忘れられなくなる。これを「怖いもの見たさ」と言うのだろうか、いくら振り払おうとしても、そのイメージの感触は生々しく私の記憶にこびりついてくる。同じ劇作家として、とてもじゃないが、この「執拗な根深さ」は私にはない。この人はどこか病んでいるのではないか。そういうことさえ思った。

受賞後の懇親会で、初めて川津さんご本人と会った。「川津です」というその顔を見て、私はたいそう驚いた。さぞや気むずかしい、胡散臭そうな人物が現れるのだろうと想像していたのだが、目の前の川津さんは短髪でござっぱりとしていて、はにかんだような笑顔を恥ずかしそうに浮かべている。

おまけに、あれこれと話し始めても常に控えめで、「前へ前へ」「俺が俺が」という執拗な印象はかけらもない。戯曲から受ける印象と、人物から受ける印象との甚だしいギャップ。いったい川津さんのどこに、あのねっとりとした創作の源泉は潜んでいるのか。今思えば、それを知りたいという興味がふつふつと私の中で大きく膨らんでいったのかもしれない。気がつくと私は川津さんに「新作戯曲を書きませんか?」と持ちかけていた。

2013年7月

「恐怖の正体」

#10 『恐怖が始まる』

偏屈者の私は「目に見えないもの」は信じない。なので霊的なことや超常現象の話題になると、どうにも居心地が悪い。「私、妖精が見えるんです」などと真顔で言われると、ひたすら戸惑う。こいつ馬鹿なんじゃないのか？ と露骨に顔に出る。

と言いながら、「あなたは何が怖いですか？」と問われれば、たぶん私は「目に見えないもの」と答える。目に見えないものを信じないのに、それを怖がるなんておかしいじゃないか。それはごもつともであるが、目に見えないものの類いが違う。

例えば、人の心。こちらが親しいと思っている相手が本心では私のことをどう思っているのか。恐怖というほどではないにせよ、相手の心の本気で探るのは、やはり怖い部類に入る。

「先が見えない」というのも怖い。この先、私はどうなるのか。5年後に何をしていた、どんな生活を送っているのか。いったい、どんな死に方をするのか。不安が限りなく増幅されると、それは恐怖に変わる。今、いじめに遭っている人。生活の糧を失ってしまった人。そういう人たちもおそらく、先の見えない恐怖を毎日味わわされているのではないかと私は思う。

さらに、「確実にそこに存在するのに目に見えないもの」も非常に怖い。例えば、放射線。どこにどの程度存在しているのか、どの程度体内に取り込まれれば体が朽ちることになるのか。その影響がはっきりとわからないということがまた恐怖を募らせる。思い起こせば多数の犠牲者を出した「地下鉄サリン事件」で使われた「サリン」も目に見えなかった。

2011年3月11日以降、私たちの暮らすこの国には「目に見えないもの」がたくさん生み出され、また、たくさんあることがあらわになってきたように思う。

福島第一原発事故で、その炉心の中はいったいどうなっているのか、2年あまりが経過した今も、それは目に見えない(見ることができない)。

放射線も間違いなく大量にあちこち存在しているに違いないが、その実態は目に見えない。仕事を、家族を、ふるさとを失った途方もない数の人々が今後どうなっていくのか、その先行きもまだまだ見えていない。

「見えないもの」は時間の経過とともに、ややもすると、「ないもの」「なかったもの」にされてしまう。そのこともたまたま怖い。例えば、このところ軋み続けている日中関係・日韓関係。ぎすぎすしてしまった原因の一つに、何かを「ないもの」「なかったもの」にしたことによる「歴史認識の違い」が挙げられると思うが、過ぎ去った歴史というものは目に見えない。見えないから、確かめるのは難しい。

「3・11」以降にあらわになった「目に見えないもの」も、もしかしたらそのうちの多くが、そう遠くない時期に「ないもの」「なかったもの」になってしまうのかもしれない。

では、いったい何が、「目に見えないもの」を「ないもの」「なかったもの」にしてしまうのか。

それは間違いなく、自分の都合のいいように認識を変えてしまう「人の心」にほかならない。私は今、「3・11」以降にあらわになった多くの「目に見えないもの」を見ようとしているのか。見なくてはならないと思っているのか。もはや私は、多くのことで認識を変えてしまっているのではないか。この考えに辿り着くと私は、私の心が怖くてたまらない。

2013年5月

「奇妙旅行」は本当に「奇妙」なのだろうか。

#9 『奇妙旅行』

忘れもしません。

12年前、『奇妙旅行』という芝居を書こうと思い立ち、ある方に取材を申し込みました。弁護士であるその方は、ご自身が奥さんを殺害されるという痛ましい経験があり、その経験を踏まえて被害者遺族の権利拡大に力を尽くされていました。しばしば、殺人事件を取り上げたテレビのワイドショーなどでもコメントを求められ、その理知的な語り口から、この方なら弁護士という職業も手伝って、被害者遺族と加害者家族、それぞれの苦悩やその緩和の方策についてさまざまな角度からお話を伺えるのではないかと。そう考えて取材をお願いしたのです。

返事は封書で送られてきました。開けてみるとA4用紙が一枚きり。そこにはワープロ打ちでわずかに数行。こう記されていました。

「被害者遺族と加害者の家族と一緒に旅をするなんて、考えただけでも身の毛がよだちます。もう少し被害者遺族の感情を考えてください。取材のご協力はできません」

唾然としました。被害者遺族の苦しく底のない思いは、自分なりに理解しているつもりでいたのですが、ここまで憎しみが根深いとは。まさに、取りつく島もない。被害者遺族と加害者側の間には想像を絶するような、決して埋めることのできない深い溝がある。改めてそれを突きつけられ、どうしようもない虚脱感に全身が襲われたことを昨日のこのように覚えています。

『奇妙旅行』を書け。そう背中をぐい、と押したのは2001年9月11日、アメリカ同時多発テロです。あのフィクションのような映像を食い入るように見つめながら、「これは間違いなく戦争が始まる」と心がざわざわしました。

報復に次ぐ報復。復讐に次ぐ復讐。これからは果てのない憎悪が世界を動かしていく。いとも簡単に瞬時にして奪われたたくさんの命のはかなさを思いながら、ただただ呆然としていました。

あれから12年近く。相変わらず人は人を殺し続けています。それは個人レベルでも絶えることはありませんし、世界に目を移せば、いつ終るとも知らない「イスラエル・パレスチナ紛争」、同じ国民同士で殺戮を繰り返している「シリア内戦」をはじめ、この地球上では毎日、誰かが誰かに殺されています。そしてたくさんの人々が毎日毎日、憎悪を抱えることになります。

もちろん、愛するものが失われた喪失感は何を持ってしても埋めることは難しい。そう思います。ですが、抱えてしまった「憎悪」はいったいどうすればいいのでしょうか。憎悪には憎悪を。憎しみが憎しみしか生まないとわかっていても、人は延々とそれを繰り返すしかないのでしょうか。

崩れゆく貿易センタービルを見ながら、そんなことを考えました。当たり前ですが、なかなか答えは見つけ出せません。そしてそれは、12年近く経った今も、目を逸らすことなく向き合わねばならない課題として僕の中にあります。

2013年2月

さまざまな「思い」との出会い

#8 ドキュメンタリーシアター『産まれた理由』

「産まれてからの一番最初の記憶は何ですか？」

3歳くらいだったろうか、客間にあったでっかい火鉢の中から両手で灰をすくっては近くのソファの上に移して山をつくり、きゃっきゃきゃっきゃとはしゃいでいたところに鬼のような顔をした父親が現れて思いっきり殴られた。もう一つ、天日に干すために半分に切ってずらりと並べてあった白菜を片っ端から近くの川に投げこんで、わはははわはははと喜んでいたら猛然と母親が走り寄ってきて思いっきりひっぱたかれた。たぶん、このどちらかが最初の記憶なのだが、どちらにしても怒られたことだけが鮮明に焼き付いている。

この質問は、本作『産まれた理由』でインタビュー取材をさせていただいた方々のほぼ全員に共通質問として尋ねたのだが、皆さん概して「怖い」「寂しい」「不安」といった記憶が多い。やはり幼子には「悲しい出来事」のほうが深く心に刻み込まれるのだろうか。すっかり老境にさしかかった今の私からすれば、まったくもって想像の及ぶところではないけれど。

「ドキュメンタリーシアター」とは、数多くの人にインタビュー取材を行い、その方々がしゃべったことを再構成して戯曲&キャラクターをつくっていく芝居のことです。ですから、劇作家としての私がひねりだした言葉はひとつもありません。すべて、今この世界にいる誰かが話した言葉です。(ただ、ちょっと小難しいことをお断りしておくならば、インタビューを通して見えてきた世界を再構築する芝居であって、インタビューの再現ではありません)

オリジナルのドキュメンタリーシアターを上演しようと思いつき、「自殺」をテーマに『誰も見たことのない場所』という作品を苦勞の末につくりあげたのは2007年のことです。あれから5年経ち、オリジナル第2弾となる今回は、「子どもを産むということ」をテーマに掲げました。「死」の対極にある「生」。そう言ってしまうと単純ですが、「自殺」についてさまざまな立場の人の話を聞くにつれ、思ってもみなかった視点や感情に出会いましたから、恐らく「命を産むこと」においても、たくさんの人から話を聞くほどに、私たちが今生きているこの社会のさまざまな側面が浮かび上がってくるのではないかと。そう考えたわけ

です。

取材は俳優たちと手分けして行いました。その数、実に59組79人。もっと事前に絞り込めばよかったと後から少し後悔しました。なぜなら、そこから言葉を選び取るためには、この方々のインタビューをすべて原稿に起こすという途方もない作業が待ち受けているからです。かくして、俳優たちは自分が舞台上で言うことになるかもしれない言葉をせつせと聞き取り、それをまたせつせと書いていくという、およそ俳優とは思えぬ仕事に膨大な時間を割くことになりました。

命が生まれることの神秘。命を授かりたいと願う人。授けたいと考えている人。子どもと真摯に向き合おうと思っている人。向き合えなかった人。今回も実にさまざまな「思い」と出会いました。しかもそれらはすべて、紛れもない誰かの本心。この事実はやはり、ずっしりと重さがあります。

ちなみに共通質問は、ほかに三つありました。「胎内記憶をどう思いますか?」「50年前に産まれた子ども、今産まれる子ども、50年後に産まれる子ども、どの子が幸せだと思いますか?」「少子化をどう考えますか?」。さて、あなたの見解はいかがでしょう。

2012年11月 古城十忍

暴力を「振るう側」の人間なのか？

#7 『みんな豚になる—あるいは「蠅の王」—』

「あなたは暴力的な人間か？」

そう問われれば、迷わず「違います」と私は答える。答えはするものの、我が日常を思い返してみると、しょっちゅう些細なことにイライラし、基本、何かムカついている。電車の中ではベタベタいちゃつくカップルや床に座り込んで大声で笑い合う女子高生、その他もろもろ気に入らない人々に片っ端から心の中で毒づき、稽古場ではなかなか上達しない若手俳優に声を出して毒づき、毒づいてばかりいる自分にまた腹を立て、「なぜ私が腹を立てているのか」を理解しない周りにさらに怒りがこみ上げる。

もしや、こうして蓄積されていくイライラやムカつきが、やがて暴力となって現れるのか。そう考えると、十分に私は「暴力的な人間予備軍」なのかもしれない。(俳優に声を出して毒づいている時点で、すでに正規軍とも言えるかもしれない)

本作はウィリアム・ゴールディングの小説『蠅の王』を下敷きにして新たに戯曲を書き下ろしたもので、ある種の「暴力」がテーマになっている。

暴力を「振るう側」と「振るわれる側」。小説『蠅の王』では無人島に漂着した子どもたちが、この二つのどちらかの側に振り分けられていく。振り分けられると言っても強制的にはない。なんとなく、いつのまにか、知らず知らず、そうになっていく。この明確な理由がないまま、そうになっていくプロセスがなんとも不気味で恐ろしい。そして、いったん始まった暴力は収まることを知らず、みるみるエスカレートしていく。

明確な理由がないまま、と書いたが、よくよく考えれば理由はある。怒りのもとはずべて、「自分の思うようにならない」、その苛立ちに起因している。

無人島の子どもたちは自分たちでルールをつくり、秩序を保とうとするが、暮らしを続けるうちにやがてルールを破る者が出てくる。そこでルールを守っている子どもは守らない子どもに「なぜ守らないんだ？」と不満を募らせ、ルールを破った子どもたちはルールそのものに違和感があり、「なぜルールを変

えないんだ?」と怒りをあらわにする。こうして「自分の思うようにならない」思いと思いが衝突して亀裂を生み、「自分の思うようにならない思い」が溜まりに溜まってついに堰を切ってあふれたとき、亀裂を埋める手段に「暴力」が使われることになる。

さて、本作に登場するのは子どもたちではなく、大人である。しかも会社勤めをしている、まっとうな社会人である。まっとうな大人たちなら、「思うようにならない」ことに直面しても、それをうまく切り抜ける方法を生み出せるはず……。とは思うものの、そう簡単に事が運ぶのなら、きっとこの世には「いじめ」も「殺人」も「戦争」もとっくの昔に途絶えているのではなかろうかとも思う。

もし、私が本作の舞台となる会社に身を置かねばならなくなったとしたら、どうだろう。暴力を「振るう側」に回ることなく、私は「思うようにならない思い」を何らかの方法で断ち切れるだろうか。

「あなたは暴力的な人間か?」。……ちょっと自信がなくなってきた。

2012年7月 古城十忍

「きっぱりした人」になりたい理由

#6 『ジレンマジレンマ』

何事につけても、いじいじ・くよくよ思い悩むことを得意とする私は、「きっぱりした人」が心底うらやましい。

物事ひとつ決めるにも、よく言えば慎重、実は優柔不断にして日和見主義の性格なので、決定を下すのにも時間がかかるし、下した後も、うだうだと思い悩み続ける人生を送っている。

そのくせ何より自分がかわいいので、「あのとき下した決定は間違っ
てなかった、あれでよかったんだ」と自分に言い聞かせる言い訳がましい理由なら百も思いつく。

なので、百の理由で自分をどうにか安心させているところに、「なぜおまえはあのとき、あんな決定を下したんだ？」と人様から問いただされようものなら、途端にぐらんぐらんと心が折れ始め、再びうじうじと思い悩む日々が始まるので、いつまでたっても「きっぱり」できない。

思えば、人生は「選択」の連続である。

その後の生活を揺るがすような大きな判断から、「今日は何を食べようか」という日常的な些細なことまで、人は来る日も来る日も、何かを選択し続けて生きてゆかねばならない。

そう考えると、これまでの人生、「いじいじ・くよくよ」にかなりの時間を費やし、「きっぱりした人」に比べて貴重な時間というものをずいぶんドブに捨ててしまったのだなと、またもうじうじし始める。

この先、もう人生の終わりがちらちらと見え始めている私からすれば、このうじうじはまことにもったいない。老い先短い日々だからこそ、これからはなんとしても「きっぱりと」過ごしていきたい。

思うにこれは、「正義」の問題である。

何事につけても、「これが私にとって正しい」という確固たる判断基準が私の中に確立していれば、恐らく私は、ぐだぐだしない。「これは、こうし

ましよう」「それは、こうでしょう」と目が覚めるようにてきぱきと決定を下し、いったん決定を下そうものなら二度と迷わず、その達成に一心不乱に突き進めるに違いない。

ああ、一刻も早く理想の「きっぱりした人」を目指して、私の正義を確立したいものだ。

振り返ってみれば、この1年間は「東日本大震災」という悪夢のような現実を目の前にして、いくつもいくつも新たな「選択」を求められた。

「ボランティアに行くべきか」「義援金を募るべきか」「支援物資を送るべきか」「私に何ができるのか」「そもそも私は何かをすべきなのか」……。その一つ一つにいいいじ・うじうじと思い悩み、貴重な1年間があつという間に過ぎ去ろうとしている。

もちろん、「私の正義」が「人様の正義」と同じとは限らないし、同じであらうはずもないと思うが、そもそも「私の正義」がなければ、どれだけ「人様の正義」と違うのかも計れない。何よりもまず、借り物ではない私の判断基準を私の中に見いださなければ、今後も私はこの上なく貴重な時間をドブに捨ててしまうことになる。

私は正義の人になりたい。うじうじ続けたこの1年間の果てにそう思い至って、私はこの芝居を書いた。……ような気がする。

2012年3月

私はどのようにして死んでいくのか?

#5 『死に顔ピース』

なるようにしかならない。今から考えてもしょうがない。

そう思いながら、「自分はどのように死んでいくのか」ということに、時折、思考を巡らせる。

今回の戯曲を書くにあたり、あれこれと本を読みあさっているうちに、「人は生きてきたように死んでいく」という文章に出くわして、「なるほど、そういうものかもしれない」と膝を打った。(※『「死にざま」こそ人生』著・柏木哲夫)

その文章はさらに、「しっかり生きてきた人は、しっかり死んでいく。不平不満を言いながら生きてきた人は、不平不満を言いながら死んでいく。ベタベタ生きてきた人は、ベタベタと死んでいく」などと続き、これを目にして、「ああ、たぶん俺は後ろの二つだ」と確信を持った。

これまでずっと、世の中や、自分の置かれている状況や、対人関係などに常に文句や愚痴を言い続け、さらに怒りにまかせてそういったことを数々の芝居にまで仕立てたきた私は、きっと間際まで「こんなはずじゃなかった」「もっとやりたいことがいっぱいあった」「ああ、死にたくない」「せめて、この死んでゆく様子を芝居にしたい」などと不満を言い続けることだろう。

しかも、父も母も癌で苦しんだ末に逝ったので、私もほぼ間違いなく癌に冒され(すでに昨年、一度胃癌になっている)、「痛い、苦しい、なんとかしてくれ」と苦痛に対しても不平をだらだらと言いつのるのだと思う。母の最期の言葉は「殺してくれ」「残念じゃ……」とネガティブなものばかりだったから、それこそ残念ながらそれは遺伝的にも立証されている。

こうして自分の「死にゆくさま」を思い浮かべてみると、少なからず気が滅入る。私とは恐らく真逆の、「しっかりと死んでいく人」というのは世の中にどれくらいいるのだろうか。

割合として半々くらいにはなるのだろうか。今からでもなんとか、そちらの側に紛れ込めないものかと思ったりもするが、長い時間をかけて獲得してきた私のひねくれた性格や価値観はそうそう容易に変わってくれそうにない。

そもそも、「しっかりと死んでいく人」に、どんな生き方をすればなれるのか、私にはさっぱりわからない。ましてや、「〇〇さん、最期、笑ってたよね」などという、にわかには信じがたい話を聞くこともあるが、「笑みを浮かべながら死んでいく人」というのは、いったいどんな人生を送ったのか。

具体的には宮沢賢治の『雨ニモマケズ』のような人を想像したりもするが、今の暗雲ばかりが垂れ込めるご時世、それは大きく的外れのような気もする。

いずれにしても「生きること」は、「不平不満を言い続けること」と、ほぼイコールだと考えている私は、恐らく最後までベタベタと生き、ベタベタと死んでいくことになりそうなので、なんだか損な性格だよなあ、と思いつつ、このやり場のない不平不満はせめて、つたない想像力を駆使して「しっかりと死んでいく人」の気分を疑似体験して解消するしかない。

これが本作『死に顔ピース』を上演しようと思った動機。……なのかもしれない。

2011年11月

人間を見つめるシニカルな眼差し

#4 『又聞きのおい出』

爆笑はせずとも、口元は終始ゆるんでしまう。ニヤニヤ、ムフムフ、積み重ねられていく細かい「くすぐり」がいつしか癖になって、新作が公開されるたびにつつい映画館に足を運んでしまう。ウディ・アレンの映画には、そんな麻薬にも似た魅力がある。

ウディ・アレンが紡ぎ出す世界をそのように捉えていたので、翻訳家の鈴木小百合さんにある日、「読んでみませんか?」と『又聞きのおい出』の戯曲を渡されたとき、「さあて、今度はどんなニヤニヤ、ムフムフを味わえるのだろう」と楽しみにして受け取ったのだが、いざ読んでみて、その思いは見事に裏切られることになった。

——ここには、今までに見たことのないアレンがいる。アレンの描く世界がある。

驚きとともに、そう思った。もちろんこれまでも、用意周到に笑いを排除した『インテリア』(1978年)や個人的にはベストワンに推したい『私の中のもう一人の私』(1989年)といった、人間の内面に奥深く迫る作品群もあったのだが、そうした作風ともどこか違う。

ひと言で言ってしまうえば、人間を見つめる眼差しが徹底的にシニカルで、それ以上でも以下でもない。これまでの作品と同じように、登場人物たちは自虐的になり、何かと言えば愚痴り、見え透いた言い訳を平気で繰り返すのだが、物語全体をハート・ウォーミングなオブラートで包むこともしないし、真面目になるのは気恥ずかしいとばかりにギャグやファンタジーに大きく舵を切ることもしない。

そこにはただ、家族を見つめ、人間を見つめるシニカルな眼差しだけがある。まるで何も調理を施さず、生の素材をそのままテーブルに並べ、「これが料理というものだ」と言わんばかりに。

このある種、開き直った態度はどこから来るのだろう。

もしかしたら「年齢」がこの謎を解く鍵なのだろうか。本作の『又聞き
の思い出』を自らの手で書いて演出したとき、アレンは68歳。初演の公演
中に69歳になっているが、人間70歳近くにもなれば、達観したような眼
差しで「人間ってこんなもんでしょ」「家族ってこんなもんでしょ」と思える
ようになるのだろうか。(自分がそうなれるとはとても思えない)

いやいや、もしかしたら、「又聞き」という発想がそもそも演劇的なのか
もしれない。又聞きの話というのは、聞いた本人がどこに心を動かされた
かで話が大きく変わってくるのが少なくない。この『又聞きの思い出』は
「長女・アルマ」が語る家族の物語としてまとめられているが、又聞きをし
た語り手が「父」であったり「母」であったり「弟」であったりすれば、まっ
たく別の家族の物語が浮かび上がってくる可能性が大いにある。いや恐ら
く、まったく別なものになるに違いない。

そう思い至ると、『又聞きの思い出』は俄然、面白い芝居になる。つま
り、観る者の想像力を無限に働かせる仕掛けが初めから施されているわ
けで、そこが実に優れて演劇的なのだと思う。

2011年5月

寓話としての『蠅の王』

#3 『蠅の王』

この芝居のいったいどこが『蠅の王』なんだ？

ウィリアム・ゴールディングの小説『蠅の王』ファンは憤慨するかもしれませんが。1954年に発表された小説『蠅の王』は、いわゆる少年漂流記もので、「無人島に幼い子どもたちだけが漂着して巻き起こる物語」ですが、この芝居の舞台設定は無人島ではありませんし（会社です）、子どもは一人も出てきません（全員、大人です）。

ですから小説がそのまま舞台化された芝居だと思っていらっしまった方には、最初にお断りしておかねばなりません。

『蠅の王』ファンの皆さん、ごめんなさい。

設定も登場人物も、小説とはまったく違います。脚本はイチから私が書きました。小説からの引用もほとんどありません。これはまるっきりの創作、新作の舞台。そう言ったほうがむしろ正しいのだらうと思います。

それじゃあ、なんで『蠅の王』なんだ？

と問われると、確かに返答に窮します。身も蓋もないですが、「僕にはこの小説は、こう読めた」と答えるしかありません。物語全体が一つの大きな、そして奥深い寓話だと、そう思えたのです。

寓話だと思って読むと、この物語は不思議といろんなことに当てはまります。

例えば、虐待を受けている幼い子どもからすれば、自分から抜け出すことのできない「暴力家庭」は無人島のような場所だと言えるでしょうし、陰湿な「いじめ」が繰り返される学校の教室もまた、なかなか他者が入り込めない無人島なのかもしれません。

「いじめ」を考えると、子どもたちの世界で起こる陰湿な攻撃は大人の世界でもいろんなシチュエーションで日常的に行われていますから、子どもも大人も何ひとつ、少しも変わらない。そう見ることもできそうです。

今回の舞台版『蠅の王』はそういう考えのもとに舞台化をスタートさせました。脚本・演出家としては、イギリス現代小説の古典を原作にして「また別の暴力」をあぶり出したいという考えを持っていたのですが、今回の舞台は「どうやら『蠅の王』に着想を得てはいるが、まったく別の物語らしい」、そう思って観ていただければありがたいです。

ワンツークスは今年度、年間を通じて「暴力」を共通テーマに芝居を上演してきました。

ひと口に「暴力」と言っても、さまざまな形があります。

昨年4月の旗揚げ公演『死ぬのは私ではない』では、国家が公認する暴力装置といった側面も持つ「死刑制度」の是非を、続く7月の『眠れる森の死体』では「少年犯罪」を生み出す背景にある若者の閉塞感を描いてきました。

そして今回の『蠅の王』。

そこでは、また別の暴力の形が描かれています。

この1年間、「暴力」を一つのキーワードとしてあれこれ考え、四苦八苦しながら作品づくりに取り組んできました。そして、どの作品と取り組んでも、最終的には同じようなことが心に残りました。

それはこんなことです。

「暴力を受けると、目の前の敵を倒すことばかりに躍起になるけれど、倒すべき大きな敵は別にいる。その大きな敵はなかなかその姿を見せず、目の前の小さな敵と必死になって闘っている者たちを見ながら、いつもヘラヘラ嘲笑っている」

2011年1月

何かを「持て余す」ということ

次世代を担う演劇人育成公演 『眠れる森の死体』

——中学2年のとき、隣の席だった目の大きくて美人のHさんが突然、転校した。Hさんは毎日のように校門の外に迎えに来ていた、派手な格好をしたニイチャンの派手な車に乗り込んで帰っていった。日によっては、いつもとは違うニイチャンがいつもとは違う車で迎えに来たりした。

転校の翌日から、「Hは妊娠して中絶したらしい」という噂がまことしやかに流れた。

Hさんは弁当の時間、いつも蓋で中身を隠すようにして食べていた。隣の席だったので何度か覗いたことがあったが、中身はいつもスパゲティのナポリタンだった。それだけが弁当箱に詰められていて、ほかには何も入っていなかった。

覗くたびにナポリタンがぎっしりなので、ある日、「いつもスパゲティだね」と言うと、Hさんは「あー、ナポリタンがすごい好きなの」と言って恥ずかしそうに大きな目を細めて笑った。

——中学3年のとき、T君のお父さんが亡くなった。

T君は父親と二人だけで暮らしていた。夜7時頃、別の友達から「Tのお父さん、死んだって」と電話があり、とりあえず駆けつけたアパートの一室には親戚との付き合いもなかったのか、同級生しかいなかった。

棺桶もなく布団に寝かされただけのT君のお父さんにどう接していいのかわからないまま、集まった15歳の同級生6人だけで通夜を過ごした。T君も含め、誰も泣かなかった。みんな進学先や就職先はバラバラで、「卒業してからも、たまに会おうな」といったことをお父さんの遺体の横でボソボソとしゃべり合っていた。

T君にも「おまえ、今日から独りぼっちだな」とか、平気で言っていた。

——高校1年のとき、中学時代に仲のよかったY君が休み時間に一人のクラスメートを刺した。

幸い刺されたほうが瞬間的に体をひねったので、ナイフが刺さったのは腕だった。大事に至らなかったからか新聞沙汰になることもなく、Y君は2、3日休んだだけで登校してきた。

Y君は事件前と少しも変わらず、いつものように「よお」と右手を挙げて話しかけてきた。いつものように4、5人で下らない冗談を言って笑い合った。なぜY君が刺したのか、Y君は何も語ろうとしなかったし、僕たちの誰もそのことは聞かなかった。「あのナイフ、いくらだった?」「どこで買った?」、そんなことを話題にしていた。

『眠れる森の死体』の初演は1995年。

今から15年前に書いた作品です。今回、長い年月を経ての再演にあたり、若者の言葉遣いを今風に書き直そうかとも思いましたが、敢えてやめました。若者を取り巻く時代も、環境も、価値観も、15年前に比べれば随分変わっているのですが、一人一人の心の奥底にある「何かを持って余している感じ」はそんなに変わっていないんじゃないかと思ったからです。それはちょうど、15年前よりさらに15年くらい前の、Hさん、T君、Y君、そして彼らと同級生だった僕たちみんながあの頃、間違いなく「何かを抱え込み、抱え込んだ何かをどうしていいかわからず、持て余していた」と同じように。

この作品に向き合うといつも、10代の頃の「ひりひりとした思い」を昨日のこのように思い出します。

あの頃、僕たちはいつも何かに苛立ち、いつもバカ笑いに明け暮れ、そしていつも無力感に包まれていました。「それが若いということだよ」と、今ではしたり顔で語ることもできますが、「何かを持って余している感じ」がどうやって自分から遠のいていったのか、それは明確には覚えていません。でもだからこそ、10代の頃に間違いなく抱えていた、「うまく言葉にできない思い」、それはきっと忘れちゃいけないよな、とこの頃、切に思うのです。

あれから相当な年月――。

天涯孤独だったT君は料理人になり、家庭も持ち、今ではある有名タレントがオーナーを務める店でシェフを任されています。

クラスメートを刺したY君は地元で警察官になり、暴走族撲滅で名を挙げたらしく、「暴走族を警棒でボコボコにすんだよ。警官は俺の天職だね」と言っていました。

ただ、Hさんだけはその後どうしているのか何ひとつ知りません。きっとどこかで、元気で、今もナポリタンが大好きで、たまにあの頃を懐かしく思い出したりしてるんだろうなと勝手に僕は思っています。

2010年7月

不可視の領域

#1 『死ぬのは私ではない』

外務省の密約文書、果たしてあったのか、なかったのか。真相がまだはっきりしない頃、関連するニュースを見聞きするたびに、大抵の人は「あつたに決まってる」と思っているだろうなあと考えた。

その理由は、外務省の体質がどうのこうのということではなく、「都合の悪いことは隠されるもんだ」と大抵の人は考えるだろうなあと思ったから。

見られては困るエロ本。見られては困る逢瀬。見られては困る帳簿。

そういったものには大抵、「正しくないこと」が隠されています（あ、エロ本だけは正しいも正しくないもないですね）。正しくないことが隠されているから、見られると都合が悪いわけですが、裏を返せば、「隠されていることは大抵、正しくない」ということになります。

外務省の密約文書に限らず、隠されていることは、世の中にはもちろんたくさんあります。

「死刑執行」もその一つです。

つい先日も中国で、日本人が麻薬の密輸で死刑判決を受け執行されてしまいましたが、どんな執行がどのようにして行われたのか、僕は知ることができません。

日本は数少ない先進国での「死刑存置国」です。

しかも、「死刑制度の存置に賛成」という世論が驚くほど高い。

5年前に行われた内閣府によるアンケート調査では、「存置派81.5%、廃止派6.0%」という、にわかには信じがたい結果が数字として出ています。81.5%といたら、圧倒的多数です。

でもこれ、本当なんですか？

81.5%のうち、ほとんどの人は死刑執行に立ち会ったことがないはず。なぜなら「死刑執行」は日本でも「隠されている」ことだから。

もし、「死刑執行」が隠されることなく、誰の目にも届くオープンなものになったとしたら、この81.5%という数字はどのように変わるものなのか。僕はそれが非常に気になります。

僕自身、自分の思いをはっきりさせるために「俺に死刑執行を見せてくれ」と切に思います。見ないことには、自分の思いに白黒つけられないし、正しくないことが隠されていないのなら、見せることはできるんじゃないかと思うのです。

本作『死ぬのは私ではない』は、こうした考えをもとにスタートしました。実際に起こった事件を下敷きにし、その事件で確定死刑囚となった人の文章をいくつか引用させてもらっていますが、もちろんこの芝居はフィクションです(たとえ、ああ、これ、あの人なんじゃないの?という人物がいたとしても)。

考えるのはなかなか難しい問題です。

でも「隠されている＝見なくていい」では決してないはず。「不可視の領域」だからこそ、目を凝らしたい。そう思っています。

劇団一跡二跳を解散して、わずか1年半で再び劇団結成と相成りました。プロデュース公演だけではどうしても獲得できない表現があると改めて思い至ったからですが、劇団ならではの特性を生かしつつ、ともに生きる私たちの社会に、「もしもし、これってどうなんでしょう?」とささやかながらも異議を申し立てる作品に取り組んでいきたいと思っています。

2010年4月